

種の論理・力学的空間・未来への象形文字

— 田辺哲学から横光利一へ —

柳瀬善治

はじめに

横光利一と同時代の哲学との関係については、すでに山本亮介、河田和子、井田将司などの考察がある。しかし「種の論理」と横光文学の並行性については十分に検討されたとはいえない。本稿では、まず田辺哲学の検討を行い、田辺が当時の量子力学の知見からアリストテレスら古典哲学を再検証し、そこから身体性や場の動性などいくつかの論点を引き出していること、さらに『上海』に代表される横光利一の文学がそれらをすべて表象しており、執筆時期の早さからある意味では田辺に先行していること、そして、田辺哲学の盲点を横光が補填しうる可能性を述べた後に、〈未来への実践とそれを担うエクリチュール〉という今日的な課題から田辺と横光の仕事の「可能性の中心」を照らし出してみたい。

一 田辺哲学の再検討1 — 「種の論理」の形成過程 —

横光と田辺哲学については、山本亮介にこのような興味深い考察がある。

「ここでの前提もまた、田辺元の思想における「人間学」というスプ

リングボードの存在と、〈身体性〉の必然的な記入である。「いやや裁断的な見方ではあるが、「身体性」にもとづく「種の論理」とは、自己の〈幻想〉・〈観念〉を破碎する〈身体性〉によって開示された「現実性」において、「個」が必然的かつ自覚的に自己否定・自己超越へと突き進み、「種」による意味づけに対し「単独性あるいは特異性」としての存在を示すことで、他者を含めた社会的諸関係の「分節化」に挑むといった、ある意味ドンキホーテ的な性質を内包していたと言えるのではないか⁽¹⁾

河田和子の『旅愁』研究⁽²⁾でも、同時代の数学的解釈の例として田辺の「特性としての科学」（昭和二三（一九三三）年一〇月「日本文化」）が取り上げられており、また、新カント派から横光の仕事を読みなおそうとする井田将司の一連の研究も重要な問題提起といえる⁽³⁾。

本稿では田辺元の哲学と横光利一との類縁性を見るわけだが、まず簡単に時系列的に種の理論構築へと至る田辺の歩みを追ってみるとすれば、田辺は昭和五年（一九三〇）五月に「西田先生の教を仰ぐ」（『哲学研究』昭和五（一九三〇）年五月）という西田哲学批判を書き、西田哲学が「超歴史的絶対的なるもの（―絶対無 引者注）を体系の principium」とし、その限定に由つて歴史的相対的なるもの（―哲学 引

用者注)を秩序付け組織することに帰着する」(『田辺元全集』第4巻筑摩書房 p.2)以下田辺元全集と横光利一全集の巻数と頁数は洋数字にて表記 旧字体は新字体に改めた)ことを批判、西田の体系には「自己否定としての反価値の原理」が「絶対無の自覚を終極原理とする一般者の自覚体系の内に」入らない(4 p.320)と述べる。おそらくこの批判を基にして「歴史的相対的」な「自己否定性」の原理としての「種の論理」が構想されたものと考えうる。

昭和六(1931)年四月には合田正人が「この小論こそ『種の論理』のまさに端緒であったと考えている」と評する「総合と超越」(『高瀬博士記念論文集』)が書かれ、一〇月には山本論が言及する「人間学の立場」が書かれている。山本論は田辺の身体性の重視が横光と共通するとしたわけだが、「総合と超越」には、まさに「身体性」への着眼がなされているのである。そこで「身体性」は「自由行為という超越的存在」を限定によって可能とするものであり、それを媒介として未来が創出されるとされる。

「而も自由行為といふももと超越的存在が自我に許容せるもの、否超越的存在自身が自己の限定を通して自ら為す所に止まるから、その自由は飽くまで限定を媒介とするものでなければならぬ。即ち身体の制限を通しての自由である。過去の負課の内容を現在に支へる外官の感覚的直観は、身体の変化の意識的記号に外ならぬのであって、之を媒介してのみ未来の自由計画も発展することが出来るのである。」(4 p.315)

そしてこうした「身体性」の考察は、カントやハイデガーをシェリングやベルグソンによって補完することによって十全なものとなると

も語られる。⁽⁵⁾

「カント自身充分に注意せず、ハイデッガーが之を注意しながら未解決の儘に残した問題は、右の如くにして解かれるのである。(略)古くは後期のシェリング近くはベルグソンの思想が、此様な身体性の考察に対して最も有力なる指導となることは改めて言ふを須みぬであらう。」(4 p.345-346)

昭和七(1932)年には「固体的本質の弁証論」(『スピノザとヘーゲル』国際ヘーゲル聯盟日本支部編 岩波書店 1932所収)と題するスピノザ論が書かれているが、そこですでに「この実体の実現に対して媒介となる否定的契機として身体の限定が要求せられる」(4 p.23)という弁証法的な身体解釈が提出されている。さらにこの年にハイデガーのカント理解を受け継いで展開させた「図式「時間」から図式「世界」へ」(『哲学研究』昭和七(1932)一月)が書かれ、「種の論理」へとつながる重要な一步が記されたのである。

この論点はすでに「総合と超越」の中でこのように予告されていたものである。

「『世界』はその時間的契機に於て無限の生成であると同時に、その空間的契機に於て既成完了の統一である。動いて動かざる具体的地平圏たる所以である。ハイデッガーがカントの思想の中心を成すものとして理性批判の枢軸と考へた時間図式論は、世界図式論にまで拡張せられなければならない。」(4 p.349)

この「図式「時間」から図式「世界」へ」では、ハイデガーのカント解釈を批判しながら未来の問題と直観を接続している点と、「世界」の「表現的性格」を相対性原理と量子力学に触れながら述べていると

ころが目目に値する。

「直観は単に現在に成立するといはんより寧ろ未来への運動を含み未来からの形成に由つて成立するといはるべき所を有する」(6 p.32)

「世界は図式として表現の性格を有するものである。然るに表現は主観客観の統一なることを特色とする」 「今や明に主観客観の二重性に於いて現るゝに至つたことが、相対性原理の画期的意味をなすのである。」「世界」図式の純粹表現性が物理学的に実現せられたもの即ち光に外ならない。」(6 p.45)

「相対性理論と新量子論とを統一する世界像」(6 p.47)を模索するこの論ではカントの図式論が時間概念から空間概念を含んだ「世界」

(この語はミンコフスキーに由来する)へと拡張され、そこでの統一は「動的発展を含む統一」(6 p.33)をなすものとされる。⁽⁶⁾

「哲学への通路」(昭和八(1933)年六月 『思想』)においては、シェリングの自由論とプラトン『テイマイオス』のかかわりが述べられている。

「シェリングがヘーゲルに反対して自由を具体的に根拠づけようと試みるに際し、プラトンの『テイマイオス』の質料を所謂高次の非存在と解して之を自由の根底としようとして企てたことは、正にヘーゲルの自由が存在に同化せられたことを証明するものである。」(5 p.10)

この論点はその後、「古代哲学の質量概念と現代物理学」でより深められることとなる。

二 田辺哲学の再検討2 — 古代哲学と現代物理学 —

「古代哲学の質量概念と現代物理学」は昭和一〇(1935)年一〇月の『思想』に発表されたものだが、この『思想』は、物理学関係の特集を組んでおり、他に仁科芳雄「量子論に於ける客観と因果律」今野武雄「偶然に就いて」などがある。⁽⁷⁾

「斯して、単に非有非存在として場所乃至空間と同一視せられるプラトンの質料が、今日我々の空間とか場所とかいう概念に由つて思惟する如く単に空虚なる受容者を意味するに止まるものでなく、その場所は、受容者であると共に、其処に受容せられるものを反対の方向に分極し動揺せしめる対立葛藤の原理なることを知らしめる」(5 p.292)

「シェリングが其自由意志論に、プラトンのテイマイオス篇の質料を、「激浪逆捲く大海」に比したのもその為の外ならぬ。」(5 p.293)

「即ち質料を空間と解するならば、その所謂空間は無記一様な幾何学的空間でなくして、異他的分化、対立的分離の機能を有する力学的空間でなければならぬ。」(5 p.293)

田辺のこの論文でプラトンの質料は「反対の方向に分極し動揺せしめる対立葛藤の原理」「異他的分化、対立的分離の機能を有する力学的空間」としてとらえなおされる。こうした論理はデリダの『コーラ』におけるプラトン理解に先立つものだとすらいえる。

プラトンの「場所」を動態としてとらえる、あるいは相対性理論と関連付ける論点はそれぞれリヴォー、テイラーら当時の海外の研究者が提出しているものであり、⁽⁸⁾こうした当時の海外の先端の解釈を踏まえながら田辺が自己の「種の論理」を練り上げていったこと、そしてデリダの議論もまたこうした西洋の古代哲学史の厚みの上に成り立つ

ていることがわかる。⁽⁹⁾

この論が「種の論理」の哲学的背景と考えられることはすでに上田泰治の指摘がある。

「プラトンの「大—小」、「不定の二」、「場所」、「非有」等の表現の下における質量の意味を、多くの学者の解釈を批判しつつシェリングの解する立場に近づけると共に、それを力の張り合ふ力学的空間として捉へるところに、「種」の意味のやがて深められて行く哲学的背景を見ることが出来る。⁽¹⁰⁾」

上田の言う「力の張り合ふ力学的空間」をさらに具体的に田辺の議論に即してみると次のようになる。

「テンソル場は却てベクトル場の如く運動の複合であるのでなくして運動の消滅たることを特色とする。併しそれは運動学的でないそれ以前の幾何学的空間に帰るのでなく、却つて反対に運動を其処から産出することのできる運動学的空間の根源に遡るのである。運動が無いのではなく、無限の運動が湧き立つために動かんとしつゝ動かれ無い運動の発起抑止の根源を表はすのである。運動を否定し消滅せしめるのも運動であるという意味に於て運動の消滅は却て運動の生起に外ならない。」(6 p317) 「種は斯かる意味に於て力学的でありテンソル的であるといふことが出来るのである。」(6 p318)

この「論理の社会存在論的構造」(昭和十一(1936)年一〇年—二月『哲学研究』247、248、249)では、物理学のテンソル場の概念を用いて、「運動の複合」ではない「運動の消滅」、「無限の運動が湧き立つ」「運動を其処から産出することのできる運動学的空間の根源」が示され、さらにそのテンソルこそが「種」の性質だとも述べられて

いる。先に見たシェリングとプラトンの言及もまたここで繰り返される。

「是れに由りそれが運動の無限なる重畳を却て静止の緊張に堪え、極微的に運動の湧立ち張り合ふ根源たるのである。シェリングが『人間の自由の本質』の論文に於て、プラトンのテイマイオス篇の質料を狂爛怒涛の大海に比した其比喻の正確なる意味は、此の如きものでなければならぬ。」(6 p321)

このように、田辺哲学においては、物理学の知見を古典哲学の新しい読みへとつなげることで「力学的空間」の発想が生み出される。そしてその発想を弁証法と接続することで、「種の理論」が生まれる。

これは、単に民族概念の可変性を示すだけでなく、湧き立つような運動性、身体性の重視および時間性との接続、あらゆるものを受容する場所ならざる場所、そうしたなかでの未来への実践を理論的に記述可能とするものである。

そして大澤真幸が述べるように、こうした田辺の論理構成は資本の運動をすら記述する可能性さえ含んでいる。

「〈資本〉は、普遍化への指向の中で、人間を特殊な経験可能領域の中に止めるわけです。人間を、特殊性の極である個(個別性)と普遍性の極である類とのあいだに挟まれた「種」の水準において把握しようとする田辺の哲学は、こうした〈資本〉の運動に見合ったものだと見なすことができます。田辺が言う「媒介性」ということは、永続的な普遍化の過程であるところの〈資本〉が人間に与える、中間的な位置—類と個の中間的な位置—に対応しているわけです。⁽¹¹⁾」

これらの思索は、興味深いことに偶然文学論が行われた昭和一〇年

前後に集中してあらわれているわけであるが、田辺の議論はむしろ相対性原理や量子力学の知見を徹底した「必然性の論理」に置きなおしているところに特色があるといえる。¹³⁾

三 横光利一との並行性——運動・時間・身体——

ここで議論を横光のほうへと向けることとしたい。田辺の議論は昭和六（1931）年前後にその萌芽がみられ、昭和一〇（1935）年から一二（1937）年にかけて練り上げられていくのだが、横光の『上海』は言うまでもなくそれより早く昭和三（1928）年から七（1932）年にかけて書かれているのである。これを同時代でそれぞれの思索が並行していたと見るか、横光のほうがいち早く先行していたとみるのかは難しいところだが、田辺が理論的に煮詰めたものとほぼ同じもの、先に述べた〈湧き立つような運動性、身体性の重視および時間性との接続、あらゆるものを受容する場所ならざる場所、そうしたなかでの未来への実践〉のすべてが横光の『上海』（そしてそれに先行する『時間』『機械』）の中に見られるということは先行研究などからも明らかであろう。¹⁴⁾

田辺の理論は、相対性理論などの理論物理学への関心ののちに「身体性」と「時間性」の問題が浮上し、さらに「運動性をはらんだ場所ならざる場所」としての東アジア表象が立ちあらわれてくる論理的必然性を説明可能とするものであり、またそれらを体現するテキストとして横光の『上海』があるのだと言える。

横光の先行研究と接続してこの問題を見てみることにしたい。山本

亮介は次のように述べている。

「とりわけ、「機械」の思考の延長上に、「意識」と「身体」のはざまに流れる〈時間〉という不可知の力の領域を措定したことは、大きな意義を持つと思われる。」¹⁵⁾

『時間』では、「時間といふ恐るべき怪物」（『横光利一全集』4 p172）が「胃袋そのものの量」（4 p188）と化すという身体性との接続が見られる。先行論では「心理」（『機械』）から「身体」（『時間』から『上海』）へ、そして「空間」と「運動」（『上海』）へと横光の変貌の軌跡が指摘されるが、ここでも横光はわずかに田辺に先行しながら同様の軌跡を描くのである。¹⁶⁾

河田和子は三木清の構想力の論理による直観の重視が横光に与えた影響を指摘している。

「こうした三木の「構想力の論理」による直観と結合した知性、即ち「創造的知性」の希求は、横光の文学的思索にも大きな示唆を与えていたものなのである。」¹⁷⁾

先に見たように、田辺の「直観」の理解が、カントの影響を受けてつ未来への実践を語ったものであることは、河田の言う横光の「創造的知性」の可能性を探るために、有力な補助線となりうる。

（ただし、田辺の理解は「過去、現在、未来を、夫々概念と構想力と直観とに配する方が、認識論的にのみならず存在論的にも一層適当ではないであろうか。」（「図式「時間」から図式「世界」へ」6 p35）とされ、「直観は成程その直接原存在に於て現在に配せらるゝの至当なること、恰も構想力が再生の能力として過去に配当せらるゝの一見正当なるに匹敵する。」（6 p36）という通常の理解とは異なる

っていることを付け加えておく。⁽¹⁸⁾

さらに、『上海』の河や民衆の表象が、身体性と運動性に重点を置いたものであることは田口律男、中村三春をはじめ多くの先行研究が指摘している。

「『上海』というテキストが明証するように、資本主義世界システムの所産である「都市」のダイナミズムを、それを分節化するエクリチュールもふくめて、「唯物論」的に表象するストラテジーにむすびついた。⁽¹⁹⁾

「恐らく現象上の河の激流の根底にあるのは、本質的違和感、もしくは根源的な離反の衝動とも言うべきものである。これはテキストの意味生成性の原基を成す、〈疎隔化作用〉alienationのエネルギーと結び付くものである。⁽²⁰⁾

中村はクリステヴァやバルトを援用して『上海』のテキスト戦略を周到に説明しているが、すでに横光とほぼ同時代（やや遅れて）に田辺が「無限の運動が湧き立つ」「狂爛怒濤の大海」「異他的分化、対立的分離の機能を有する力学的空間」として同様の論理を提出している。またこうした論理が田口の言う「資本主義世界システムの所産である「都市」のダイナミズム」、横光自身の言葉で言い換えるなら「資本主義的国家主義的現実の速度」（『唯物論的文学論について』『横光利一全集』13 p100）を説明する論理足りうることも、先に述べたとおりである。

四 「開かれること」と〈感染〉という誠実性

こうした表象、〈湧き立つような運動性、身体性の重視および時間性との接続、あらゆるものを受容する場所ならざる場所〉（なぜここで、〈未来への実践〉を省いたのかについては最後のところで改めて触れる）が、デリダの「コーラ」を予言するかのようである種の〈開かれた場所ならざる場所〉であるということは先に述べたとおりだが、このような〈あらゆるものを受容する場所ならざる場所〉は、ある政治的な難点がある。

デリダの死の直後に行われた長原豊との対話の中でデリダの「コーラ」について鶴飼哲は「コーラそのものは決して傷つかない。しかし、何でも受け入れるがゆえに、もつとも醜悪なもの、もつとも傷つけるものがすべてがそこに投下されてくる、そういう場」「この世のあらゆる出来事が叩き込まれる場」と述べている。つまり「開かれた場所」「開かれた身体」は、そこに「もつとも醜悪なもの、もつとも傷つけるもの」が到来してもそれを拒むことが〈理論的にできない〉⁽²¹⁾。横光の『上海』のダイナミズムが評価される一方で、『旅愁』の〈退行〉がしばしば政治的に批判されるが（この断層は田辺の「種の論理」と戦後の「懺悔道の哲学」との断層にも比せられる）、これは〈あらゆるものに開かれた場所・身体〉を描いた思想家・芸術家が否応なくその後到来した何者かに〈感染〉（デリダ）してしまった結果なのではないか、むしろそれはある種の〈誠実性〉の証なのではないかと私は考える。政治的であれ芸術的であれ、一つの基準のみで裁断することなく、『上海』だけでなく『旅愁』をも包括しうる再評価の視座というものが求められることとなる。^(22,23,24)

では、そのような再評価のトータルな視座をどのように構築するか

ということになるのだが、論理的な緻密さ、また哲学史的の史的展望とその論理の応用の射程距離という点では、つまり純粹に理論的な観点から見れば、横光の「理論」は、田辺と比較の対象にすらならない（田辺のほうが格段に上）のはいうまでもない。しかしながら、理論や戦略の緻密さがその文学者の価値をすべて決めるわけではない。

蓮実重彦がブランシヨとサルトルに触れて言うように「ブランシヨがついに越えられない地点にまでサルトルがたえず行つては引き返してたんじやないか」「小説そのものに内在している限界を、サルトルは小説を含めたその文章体験のあらゆる領域で体質的に超えてしまっている（サルトルが執拗に「未完」を繰り返したということ―引用者注）んじゃないか」という議論は、少なくとも文学者に於いては、成立するのである。

五 田辺を補完する横光 ―エクリチュールという希望―

では田辺が横光を「ついに越えられない地点」とは何か、横光の「小説を含めたその文章体験のあらゆる領域で体質的に超えてしまっている」ものが何であるのかが考察されねばならない。田辺哲学の空白を横光が埋めるかもしれない部分、それは合田正人が田辺哲学に対して提出する二つの疑問点に関わるものである。

一つは、「家族」の本義を「氏族」に求めた田辺は、種をプラトンのいうコーラのごとき「個の存在の母胎」(6/26)とみなしつつも、生殖や性の問題にはほとんど言及していない」という問題である。初期横光に執拗に見られる男女や性愛への異様なほどのこだわり、さら

に（吉本隆明が『悲劇の解説』で記しているように）⁽²⁷⁾ その心理主義的表象がはらむ不気味なずれば、田辺の（形式的に整いすぎた）「種の論理」を補完する意味でもう一度顧みられるべきだろう。⁽²⁸⁾

もう一つは、「田辺におけるエクリチュールの不在」という問題である。

「種の論理」が「論理」である限り、田辺自身、一方ではそれを主語―繫辞―述語の命題構造に即して詳説しながらも、記号ないし言語の存在にも、それと図式との連関にも全く言及していないからである。「しかし、「種」の「無記透明なる」存在に記号と言語が及ぼす作用については全く触れられていない。例えば「はな―まさに「徴し」（折口）―という語が、多様な植物を統一的に名づけると同時に、種の静的統一を破る「危うい迷い路」、ジョイスやデリダやジャン＝リュイ・カルベのいう「言語戦争」^{ポレモス}、「異種言語混濁」^{パベリズム}を内蔵していることに「アララギ」の歌人、田辺はなぜ言及しなかったのか。これは「種の論理」の決定的な問題点であろう。」⁽²⁹⁾

合田の批判は、言ってみればデリダの言う「散種」に該当するものが田辺の中にないという批判であるといえる。⁽³⁰⁾ 篠田浩一郎、小森陽一、中村三春、田口律男など、横光研究史においては横光のエクリチュールの問題＝言語の意識に対する外部性、横光の言葉を使えば「象形文字」「独特の形式論」（『文芸時評』(一)『横光利一全集』13 p154）の重要性が、しばしば語られてきた。この横光の「象形文字」の問題について、河田和子は『旅愁』や初期作品を例に挙げながら、「旅愁の斬新さは、原理的対立、思想的問題を数学で象徴的に表そうとしたところにある。（『文学的象徴』）として数学を文学の表現に用いたこと

が、読者にとつて難解なものとなり、誤解を生んだものの、横光は言語記号の組み合わせによって新たな概念、世界の秩序を構想する「アルス・コンビナトリア」（＝象徴主義の言語結合術）として、象徴表現による新しい精神世界の秩序を構想しようとしていた⁽³²⁾と述べている。

この「象形文字」「散種」の問題は、現在の、そして〈未来への実践〉の問題にそのまま関わるものである。

田辺が「相対性理論と新量子論との総合」を目標として構想した空間と時間のダイナミズムを記述する「種の理論」は、「原爆投下による日本の敗戦」で政治的にも理論的にも解体したと言える。また、横光研究に於いても、『旅愁』以後の仕事に関しては、その芸術的な可能性（もしくはそこから帰結する倫理的誠実性）についてはともかく理論的・政治的可能性を引き出すことは著しく困難である。

しかし、現在の〈われわれ〉が「彼らの〈破綻〉をどのようにして批判することができるのか」という問題は残る。三・一一の福島第一原発事故以後、国土、国民、そして皇室を守る言葉を紡ぎだせず、ひたすら目を背け続ける日本の保守思想はその基盤を完全に失って崩壊した。そして今後、数えきれないほどの「ディアスポラ」や「サバルタン」を生んでしまうであろう状況下で、ポストコロニアル批評は、その思想的強度を根本から問い直さねばならなくなるであろう。これまでの日本の言論空間に於いては「ディアスポラ」や「サバルタン」はどれほど真摯に語られても、それらは観念的な〈表象〉でしかなかったように思われる⁽³³⁾。しかし今後それらは「切つて赤い血の出る」（中上健次）、〈隣人〉の、あるいは〈自分自身〉のことになるのである。

つまり思想史的基盤も政治的展望も何も持ちえない〈われわれ〉（とは、しかし、いったい何を指すのであろう）は彼らを批判する視座すら実は持ちえていないのではないかということである。

六 未来への〈神話的形象〉

— 「時間という怪物」に抗して —

そうした状況下で浮上する問い、それは〈三・一一〉以後の神話的形象〉という視角から田辺と横光の仕事を見直すことはできないかということである。

「神話的」という言葉で『旅愁』を含めた晩年の横光の営為を語るのはあまりにきわどい議論だと思われるかもしれない。ここでの「神話的」とは、河田論の言う「アルス・コンビナトリア」（＝新たな概念、世界の秩序を構想する）と近い意味で用いているが、「神話的」にはさらにもう二つの意味を含ませている。

一つは出来事や言葉が生成する場所をもう一度追体験するためにも再創造するということ（三島が言う「原体験をもう一度神話時代のために再してみよう」あるいは中村光夫が言う「物に名をつける前の沈黙」⁽³⁴⁾、具体的には七〇年代後半から八〇年代前半の中上健次や古井由吉の仕事⁽³⁵⁾を想起してみること）であり、もう一つは通常の歴史認識能力を超えた未来にまで伝達する言語の可能性（東浩紀がデリダを敷衍して言う「郵便的」言語をここに含めてもよい）⁽³⁶⁾を探るといふことである。つまり「通常の歴史認識能力では扱えない時間性をどのように思考し表象するか」という問題である。

ここで示唆的なのは哲学者の菅原潤の最近の提言である。菅原はハ
ンナ・ヨナスの世代間倫理とシェリング哲学の神話の問題を接続しよ
うとしているのだが、それは次のことを意味する。

（数万年前の人類の営為を伝えるものがラスコーの壁画しかないよう
に放射能の半減期がすべて終了する一〇万年後の生命体に原発事故の
記憶を伝えるのは神話的形象しかありえない）

「参考までに今から一〇万年前に地球上で発生した事件を述べれば、
人類の原型が登場したのがほぼ一〇万年前であり、ラスコーなどの洞
窟画が現れるのが三万年前から一万五千年前だというのだから、一〇
万年後の世界というのは宗教というよりも進化論のかかわる世界だと
言うことができる。つまり現在の人類の同一性が保証されない時代だ
というわけだが、原発事故を起こしたのは他ならぬ人間なのだから、
その人間が犯した責任を引き受けるタイム・スパンとして、従来なら
人類の理性や想像力のおよぶはずのない年数が期せずして人間的な尺
度に換算される事態に達したという事実を厳粛に受け止めなければな
らない。」⁽³⁷⁾

この菅原の問いかけで重大なのは、放射能核種の半減期が数万年単
位であり、「人間の歴史認識能力を超えてしまっている」ということ
である。つまり今後、文学も思想もこれまでの時間性では処理できな
い巨大な問いを問わなければならなくなったのである。横光の言う「時
間といふ恐るべき怪物」は、今後表象も想像もできない真の怪物性（こ
れは想像も表象もできない放射性核種の怪物性と同様である）をもつ
て立ちあらわれてくるであらう。

（二）から『旅愁』『夜の靴』『微笑』といった晩年の横光の仕事の

意味を、もう一度考え直してみる必要がある。田辺の晩年の懺悔道の
哲学と量子力学との奇矯に見える接続の意味、さらにはヴァレリー・
マラルメ研究の意味も、また別の角度から浮かび上がってくると思わ
れる。⁽³⁹⁾

田辺と横光が共に〈破綻〉したその地点を開口部として読み直すこ
と、その裂け目に垣間見える「心の奥底の暗黒」に刻まれた「組み
合わせ文字」⁽⁴⁰⁾に直面し、そこに未来への希望をさらに刻み込むこと
―今こそこうした実践が求められなければならない。

注

(1) 山本亮介「上海」（『ある長編』）（一九二八「昭三」〜一九三二「昭
三」）『横光利一と小説の論理』（笠間書院 2008 a201）。

(2) 河田和子「横光利一における20世紀の「数学」的問題―近代科学の超
克としての古神道―」（『戦時下の文学と日本的なもの―横光利一と保田興
重郎―』花書院 2009）。

(3) 井田将司「横光利一における「形式主義」―「個性」という形式につい
て―」（『日本近代文学』82 2010）、同「横光利一『微笑』という視差―「排
中律」にこころ―」（『日本文学』2012・2）。

(4) 合田正人「「種の論理」批判序説」（『現代思想 特集メディアオロジ
ー』2000・7）。

(5) 田辺哲学におけるベルグソンの重要性については合田前掲論文、および
酒井直樹「日本人」であること」（『思想』1997・12）を参照。

(6) なお、アインシュタインを新カント派との関連でとらえる見方としては、
カッシーラの『アインシュタインの相対性理論』（河出書房新社 1989）及び
それを受けた廣松渉『相対性理論の哲学』（勁草書房 1989）がある。

(7) この二つの論は中河与一『偶然と文学』（第一書房 1935）の巻末に収
められた「偶然論に関する文献目録」に含まれたものである。

(8) Albert Rivaud *Le problème du devenir et la notion de la Matière*
dans la philosophie Grecque (Paris 1906)

田辺の言及箇所は p291。

A. E. Taylor A commentary on Plato's Timaeus (Oxford Clarendon Press, 1928)

「リヴオーが「その隅々までも絶えず激動せられ、動揺せしめられる」動く場所と翻するのも同じ意味である」(5 d293f)

「テイラーがテイマイオス篇の注釈書 (A. E. Taylor A commentary on Plato's Timaeus) の付録に、「この篇に現はれたプラトンの時間論を相対性原理の空間時間論と関係させて論じたのも、斯かる見地から見れば首肯し得る着眼点といはなければならぬ」(5 d318)。

(9) デリダは『コーラ』の注で(田辺が参照したのと同じ)リヴオーの研究に言及している。ジャック・デリダ『コーラ』(未來社 2004 a91)。

(10) 上田泰治『田辺元全集5』解説(筑摩書房 1963 P507)。田辺の数学・物理学理解について永井博「田辺弁証法と自然科学」、澤口昭幸「田辺元における数学の形而上学」(ともに『田辺元 思想と回想』筑摩書房 1991)。

(11) 大澤真幸『戦後の思想空間』(ちくま新書 1998 d14)。

(12) 真銅正宏『偶然という問題圏—昭和一〇年前後の自然科学および哲学と文学—』(『日本近代文学』59 1998・10)、中村三春『量子力学の文芸学—中河與一の偶然文学論—』(『日本近代文学と西欧』翰林書房 1997・7)、山崎義光『中河與一の偶然論と『愛戀無限』』『近代の夢と知性 文学・思想の昭和一〇年前後』(翰林書房 2000)。

(13) こうした弁証法への還元?は、かならずしも思想的に反動的な立場(たとえば統一・全体性が現在思想で付与されている否定的なイメージ)を示すというわけではない。弁証法についてはこうした見解もあることを付け加えておきたい。

「市田」というのは、アルチュセールにとつてデリダは、どうもヘーゲルに近いと見えていたらしいんです。(97年ごろ—引用者注)当時デリダと集中的な議論をしたみたいで、ノートも残っていますが、その結果、デリダというのはとにかく哲学を弁証法に還元する、還元したうえで否定しようとするが、それ自体は非常に弁証法的ではないか、という評価をします。まさに弁証法と戯れているという印象を非常に強く持ったみたいです。

今村 それは当たってますね。「市田良彦・今村仁司」アルチュセールのアク

チュアリティ」(『現代思想 特集 アルチュセール』1998・12 d80)

(14) もちろん、「湧き立つような運動性」を、そのまま「アジア的なものの表象—再現とみなしてしまうのは、それ自体オリエンタリズム的な偏向があるといえるが、『上海』というテキストがまさにそうした「表象」(これは「再現」とは限らない)をなしているのだから、ここでは、『上海』のテキスト戦略を支えているものと同様の論理が同時代の田辺哲学において提出されていると述べるにとどめる。この点に関しては別稿を用意している。

(15) 山本亮介「時間」(一九三二「昭六」)(『横光利一と小説の論理』笠間書院 2008 a182)。

(16) 『時間』の先行論として前掲山本論、田口律男「横光利一『時間』論—『機械』からの変質—」(『山口国文』7 1984・8)。

(17) 河田和子「横光利一における20世紀の「数学」的問題—近代科学の超克としての古神道—」(『戦時下の文学と日本的なもの—横光利一と保田與重郎—』花書院 2009)。

(18) 田辺の直観理解と新カント派との差異について岡村信孝「田辺元と認識論—直観と思惟との関係をめぐって—」(『田辺元 思想と回想』筑摩書房 1991)。

(19) 田口律男『都市テクスト論序説』(松籟社 2006 d246)。

『上海』の典拠の問題について、掛野剛史「横光利一『上海』の典拠—雑誌『国際パンフレット通信』・長野朗『華僑』—」(『横光利一研究』第九号 2011)、石田仁志「横光利一『上海』のインタテキストチュアリティ—表象の論理—」(『文学論叢』第八十六号 2012)。

(20) 中村三春「非構築の構築—横光利一『上海』の小説言語—」『弘前学院大学紀要』第33号 1987)。他にテクストに即して『上海』の「形の運動」と「力学」を分析したものとして石川巧「『上海』の力学(場)の運動に関するノート」(『山口国文』22 1999)。

(21) 鶴岡哲・長原豊「遺産相続」『現代思想 緊急特集 ジャック・デリダ』(青土社 2004・12)。

(22) この点に関して、拙稿「過視的な終末あるいは襲のなかの偶有」(『原爆文学研究』一〇 2012・12)、拙著『三島由紀夫研究 「知的概観的な時代」のザインとゾルレン』(創言社 2010)。

- (23) 代表的な例として小森陽一『ゆらぎの日本文学』(NHKブックス 1998 p167)。厳密には小森は『旅愁』の〈退行〉の萌芽が『上海』のお杉造形に孕まれていると読むのだが、同様に『上海』に「掃溜の論理」から「掃溜の論理」への転調(『旅愁』の子兆)を読むものとして二瓶浩明「横光利一『上海』その意図と達成—〈論理〉から〈倫理〉へ—」(『山形女子大学紀要』第16集 1984・3)。
- (24) 上の点で、私は小森陽一より中村三春の横光研究のほうが「論理的に」正しいとさえ考える。中村の『旅愁』論としては「係争する身体—『旅愁』の表象とイデー—」(『横光利一研究』創刊号 2003・2)。
- (25) 蓮実重彦・清水徹「フランシヨ 現代史を生きた謎の文学者の遍歴」(『饗宴I』日本文芸社 1990 p203)。
- (26) 合田正人前掲論文 p216。
- (27) 吉本隆明「横光利一」(『悲劇の解読』ちくま文庫 1985 初出は1979・4『海』)。
- (28) 上の二つの論点を繋ぐ鍵、それは合田論も示唆するように(9216)フロイトである。サイドの『フロイトと非ヨーロッパ人』(平凡社 2003)『始まりの現象』(法政大学出版社)のフロイト理解、柄谷行人の「交通空間」の問題もこうした問題系から再読の必要がある。
- (29) 合田正人前掲論文 p216。
- (30) 「エクリチュール」や「散種」に該当するものが、田辺の「絶対媒介の哲学」の中に存在しないとすれば、ではエクリチュール=認識の外部とは無媒介なのか(それでは西田の「絶対無」と同じになる)、あるいは「媒介されていないはずの原初がすでに他者に横断されている」とはいかなる状態なのか(デリダの「アルシーエクリチュール」、柄谷行人の「貨幣」「交通空間」はそうした状態について扱ったものだろう)、「あらゆる他者に開かれた空間」とははたしてその原初の反復であるのか否か、注28で述べた問題系とはこのようなものである。
- (31) 篠田浩一郎『小説はいかに書かれたか—「破戒」から「死霊」まで—』(岩波新書 1982)、小森陽一『構造としての語り』(新曜社 1989)、中村三春前掲「非構築の構築」、田口律男前掲『都市テクスト論序説』。
- (32) 河田和子「〈文学的象徴〉としての数学と『旅愁』—」(『戦時下の文

学と日本的なもの—横光利一と保田與重郎—」花書院 2009)。

- (33) この点について前掲拙稿「過視的な終末あるいは饗のなかの偶有」及び拙稿「十年目の節目に」(ともに『原爆文学研究』10 2012・12)。
- (34) 三島由紀夫・中村光夫『人間と文学』(講談社 1968 p227 43)。
- (35) 「零のエロスにむかひ」(『杼』NO5 1986 p13)での古井由吉の発言を参照。具体的には古井の『聖』三部作。
- (36) 東浩紀『存在論的、郵便的』(新潮社 1998)。
- (37) 菅原潤「3・11以降の弁論的思考とシェリング」(シェリング学会 2012・7・8 発表原稿)。菅原本人より提供を受けた。
- (38) 原爆文学とSFの問題について野坂昭雄「核批評と核SF」(『原爆文学研究』10 2012・12)。
- (39) 例として、戦後の「科学と哲学と宗教」(筑摩書房『哲学講座IV』1960・3)、『ヴァレリの芸術哲学』(筑摩書房 1951)、『マラルメ覚書』(筑摩書房 1961)。新カント派と記号の問題については前掲カツシラー『アインシュタインの相対性理論』の山本義隆訳者解説、「特別インタビュー 京都学派と三〇年代の思想」での久野収の発言参照(『批評空間』II-4 1995 p14)。
- (40) 合田前掲論文 p202 (この言葉はカントの図式論に由来する)。

※付記 本稿は二〇一二年九月九日に行われた「国際シンポジウム 戦間期東アジアにおける日本語文学 1920—1945」(龍谷大学ミュージアム)で報告した口頭発表原稿に基づいている。席上貴重なご意見を頂戴した参加者の皆さんに厚く御礼申し上げます。

(二〇二二・九・一八 於台湾)

(やなせよしはる 台湾 静宜大学外語学院日本語文学系副教授)